造血幹細胞移植患者の継続的看護支援システムの開発

医療法人　原三信病院　看護部 横田宜子 他

はじめに

同種造血幹細胞移植（移植）を受けた患者は、慢性Graft versus host disease（GVHD）などで退院後もQOLが低下することあるが、退院患者を長期フォローする我が国の医療体制は不充分と考えられている[1)]。退院という療養環境の大きな変化に直面する患者を継続的に支援するには、移植を受けた患者自身の主観的体験を知る必要がある。移植患者が退院後の生活を再構築するには、医療チームの支援が重要とされるが[2)]、具体的なあり方は依然として課題である。

1)萩原將太郎, 望月朋美, 近藤美紀, 森文子, 福田隆浩. 我が国における同種造血幹細胞移植患者の長期フォローアップの実態調査. 臨床血液: 2010; 51: 167-173.
2）石田和子, 萩原薫, 石田順子, ほか.造血幹細胞移植患者が退院後に遭遇する困難と移植後の生活を再構築できる要因. The Kitakanto Medical Journal: 2005; 55: 97-104

目　的

移植患者が退院後に遭遇した体験を患者の語りより明らかにし、患者の主観的体験に添った継続的支援のあり方という視点で考察する

対象と方法

研究デザイン：　質的記述的研究

対　　象　　：　移植を受け外来通院中の患者

研 究 期 間　：　2010年1月～3月

デ ー タ　　：退院後の生活で遭遇した困難な体験、退院後に医療者に望むことについて半構成化面接を行った。

分　析

1. 逐語録より、退院後に感じた困難や体験について語られている部分を意味の損なわれないように区切り一次コードとした。

2. 一次コードから抽象度を高めながら、意味が類似している集合体に名称をつけ二次コード、三次コードとした。

3. 三次コードから類似するものを集め、抽象度を高めながらカテゴリー化した。

倫理的配慮

対象者へは、研究の主旨を文書と口頭で説明し同意を得た。プライバシーおよび尊厳を守ること、匿名化すること、承諾してもいつでも拒否できること、拒否しても日々の診療や待遇には何ら影響しないこと、「語り」の内容についても不利益を被ることがないことを説明した。
当院の倫理審査委員会の承認を得た。

結　果

1. 対象者の概要

移植後16～40ヶ月を経過した患者5名
女性2名、男性3名、年齢：30～50歳代
面接時間：13～64（平均43.2）分
面接回数：1～2回
全例に慢性GVHDの体験があった

2. 分析結果

235コードから、16サブカテゴリー、5つのカテゴリーを抽出した

分析結果

カテゴリー	サブカテゴリー
病状体験に伴うつらさ	遷延する慢性GVHD
	低下している身体能力
	長期化する治療
自己概念のゆらぎ	困難感へのつらさの表出
	普通の日常生活を送れないつらさ
	不安な時期
相談相手を希求	医師に相談することへの躊躇
	看護師との距離
	相談先が不明瞭
	専門的治療ゆえの理解者不足
周囲との関係の変化	周囲への配慮
	周囲から受ける配慮
	家族の中での空虚感
考え方や思考の変容	あきらめという思考
	役割喪失の克服
	前向きな思考

考　察

多職種の医療チームに支えられる入院から、退院という療養環境が大きく変化する中で、『きつかった時に接してくれた病棟看護師に声をかけてほしい』と感じ、移植医療の専門性と特殊性を熟知している患者は、自分の治療過程を把握している理解者が退院後は主治医のみであることに不安を抱き相談相手を希求していた。移植看護に詳しい看護師が主治医と協働し、退院後も一貫した相談者となることは、主治医以外の継続的支援者が不十分なことが多い我が国の療養環境において、患者の意向に添う端緒になる。

考　察

家族や社会環境が介在する困難な体験のプロセスに対する直接的支援は困難だが、継続的に関わる看護師の存在は、移植病棟と外来看護師の情報共有を促し、心理療法士の関わりを促すなどの役割を担うことで、間接的な支援に寄与できる可能性がある。我が国の治療環境の中で、移植の専門性を考慮して患者の意向にも添った継続的支援体制を構築し、看護師も医療チームの調整役として、患者への傾聴と共感の姿勢をもって主体的に関わっていく必要がある。

まとめ

- 移植患者は、病状に伴う身体的・精神的なつらさを感じ、家族・社会環境の中で不安が惹起されるなど、退院後にさまざまな体験に遭遇していることが明らかとなった。

- 移植患者は、自分の治療過程を把握している主治医以外の相談相手を望んでいた。

- 看護師も医療チームの調整役として、移植患者への傾聴と共感の姿勢をもって主体的に関わっていく必要がある。

研究の限界と今後の課題

本研究は、移植患者への継続支援について示唆を与えるものであったが、少数の移植患者の語りを分析したものである。今後は、研究結果を活かした継続看護支援を実践して、より多くの移植患者の主観的体験に接する中で、検討を深めていくことが課題である。

謝　辞

本研究にご協力いただきました、移植患者様、
医療チームの皆様に、心より御礼申し上げます。

本研究内容の詳細は、下記をご参照下さい。

**継続的支援のための同種造血幹細胞移植患者の
退院後体験に関する質的研究**

横田宜子 他. 臨床血液. 25巻4号　in press